SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ル・ボンの民族心理学の東アジアへの受容：李光沫・夏目漱石・魯迅を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008195

ル・ボンの民族心理学の東アジアへの受容
―李光洙・夏目漱石・魯迅を中心に―

南　　富　　鎭

1．問題提起の自己弁明

ギュスターヴ・ル・ボン（1841－1931、Gustave Le Bon）の名前を最初に知ったのは、2001年の初めのことであった。日本学術振興会外国人留学生の身分であった私は、博士論文をまとめた拙著『近代文学の〈朝鮮〉体験』(2001年）を出版し、２冊目の日本語著作として『近代日本と朝鮮人像の形成』(2002年）の執筆に取り掛かっていた。植民地朝鮮研究の中でしばしば民族性の議論に出会ったからである。もうひとつ、日本で暮らすいわば自己の問題もあった。そのなか、李光洙の「民族改造論」を執筆する過程で、ル・ボンの存在を初めて知り、調査に着手し、李光洙とル・ボンの関係を論文として発表した（「近代日本の朝鮮人像の形成―李光洙「民族改造論」を中心に」『明治から大正へ―メディアと文学』筑波大学近代文学研究会編、2001年８月)。本稿第３章を構成する「李光洙の場合」の主要な内容になるものである。その後、しばらく放置した。しかし、ル・ボンの民族心理学が東アジアにおいて大きく展開されていることは認知していた。また直感的に李光洙の「子女中心論」(1918年)「少年に」(1921年）と魯迅の「狂人日記」(1918年）には密接な類似性があり、ともに民族心理学の受容が感じられたが、それを論ずることはなかった。漱石の文明論との関係性についても同様であった。

しばらくしてからの2011年、畏友の藤尾健剛氏から大著『漱石の近代日本』(2011年）が送られたが、そこには「ル・ボン『社会主義の心理学』の波紋」が収録され、氏が1995年より漱石文学とル・ボンとの影響関係に興味を持っていたことが分かった。さらに2013年に日本での朝鮮文学研究の権威者である波田野節子氏から『韓国近代文学研究―李光洙・洪命熹・金東仁』(2013年）が送られたが、その中に「李光洙とギュスターヴ・ル・ボン」という章があり、内容は詳細だった。波田野氏は李光洙研究の専門家でもあり、またフランス語にも

精通しているため、ル・ボンと李光洙の関連性にはおそらく論者よりも早い段階から注目していたであろう。それらに接し、ル・ボンを東アジアにおいて広く展開する必要性を感じていた。

ちょうどその時に持ち上がったのが、藤井省三氏の科研費補助金による国際共同研究「現代東アジア文学史の国際共同研究」(2013年) であった。ここで初めて私自身の従来の研究と先行研究を踏まえ、ル・ボンを東アジアにおいて総体的に論じてみることにした。李光洙・夏目漱石・魯迅というそれぞれの国を代表する作家から民族性に関する片鱗をル・ボンに探し求めてみようと思った。しかし、この試みがいかに無謀であるかはすぐに気づかされた。三つの言語、膨大なそれぞれの全集、気が遠くなるような先行研究に目を通すことさえままならないことが分かった。共同研究者の中には魯迅研究の権威者や中国・台湾籍の碩学も多い。後悔したが、研究題目を提出した以上、もう後の祭りであった。研究発表の締め切りが迫る中で、窮余の一策として最終的に選択したのは「自己本位」の「管見」という言葉であった。「自己本位」の「管見」でないと、漱石や魯迅について私がなにかを述べることは到底できない。

以上のようなことから、今回の発表はあくまでも試論ということになる。あるいは問題提起に近いかもしれない。いわゆる「本論」になるかどうかは、多くの教示を得た後のことになるであろう。

2．ル・ボンの民族心理学

フランスの社会心理学者ル・ボンの民族心理学が日本に初めて紹介されたのは、1900年10月、育成会発行の『心理学書解説第五巻、ル・ボン氏民族心理学解説』である。1895年の英訳版『民族心理学』をもとにし、それを概説的に抄訳したものである。これが1910年１月、大隈重信らが中心になって結成された大日本文明協会によってフランス語から本格的に『民族発展の心理』という題で全文翻訳され、ル・ボンの代表作『群衆心理』と姉妹本のかたちで出版される。ロシア駐箚大使男爵水野一郎の周旋によるものであった。さらに大日本文明協会は、1915年１月、『民族発展の心理』と『群衆心理』を合本にし、『民族心理及群衆心理』という題で再出版する。『民族心理及群衆心理』は一年の間に三版を重ねるほど好調の売れ行きで、当時としてはめずらしく1918年11月には縮刷本としても刊行された。それ以降、ル・ボンの『民族発展の心理』と『群衆心理』に関する翻訳や解説書、類似本などが多く出版されていくが、それらは割愛し、本稿と関係する日本でのル・ボンの受容（翻訳）を簡潔に示しておく。

塚原政次『心理学書解説第五巻、ル・ボン氏民族心理学解説』育成会、1900年10月（英訳からの抄訳）

原著：Lois psychologiques de l'évolution des peuples（1894年）

英訳：The Psychology of Its Influence on Their Evolution（1896年）

前田長太『民族発展の心理』大日本文明協会、1910年８月

原著：Lois psychologiques de l'évolution des peuples（1894年）

大山郁夫『群衆心理』大日本文明協会、1910年12月（英訳から重訳）

原著：La psychologie des foules（1895年）

英訳：The Psychology of Peoples（1899年）

合本『民族心理及群衆心理』大日本文明協会、1915年１月

縮刷本『民族心理及群集心理』大日本文明協会、1918年11月

３．李光洙の場合

李光洙の代表的な思想は「民族改造論」といってよい。それは今日まで様々な議論の対象になって批判されているが、その要諦は、朝鮮民族は多くの民族的な欠陥を有しており、民族の持つ根本的な欠陥を改造しないと民族の将来は期待できないというものである。民族として生き残るためには、民族の様々な欠陥を反省し、「改造」していかなければならないという主張である。そしてこうした思想はル・ボンの「民族心理学」に大いに依拠していた。

李光洙は、「民族改造論」（1922年５月）発表のちょうど一か月前の『開闢』誌上に、「国民生活に対する思想の勢力―ル・ボン博士著『民族心理学』の一節」（1922年４月）という翻訳文を掲載している。翻訳文は、ル・ボン『民族発展の心理』の第四編「種族の心理的性格は如何にして変化するか」の第一章を抜粋翻訳したものである。その章の中心内容は国民性の変化が全く不可能ではなく、その僅かな可能性について言及した部分である。このル・ボンの翻訳からまもなく「民族改造論」が執筆されるのである。

さらに「民族改造論」は民族改造の可能性としてル・ボンの民族心理学を重要な根拠として引用しており、李光洙の民族改造論はまさにル・ボンの民族心理学を土台にして構築されたものである。それでは李光洙思想の根幹をなしたル・ボンの民族心理学とはどのようなものであったのだろうか。

李光洙は、大日本文明協会から翻訳された合本『民族心理及群衆心理』の一節を朝鮮語に翻訳紹介し、「民族改造論」のなかでも引用しているが、李光洙が翻訳し、引用したテキストは、1918年11月版の縮刷本のように推測される。し

かしながら、李光洙におけるル・ボンの影響が縮刷本以降という断定は早計であろう。なぜなら、それ以前においても「民族改造論」に至るル・ボンの民族心理学への影響は大いにみられるからである。「子女中心論」「新生活者」などがそれである。しかし、おおむね1918年前後のことのようにも推測される。

ル・ボンの民族心理学の内容は、当時流行であった社会主義平等論に対抗するもので、その大まかな論旨は、それぞれの民族は平等なものでなく、個別の民族性によって差別があるというようなものである。社会主義者らが主張する教育や制度による一概の平等性を否定するものであった。つまり、それぞれの民族の心理的特性は生物的特性と同じように、長年の遺伝的な蓄積によるもので、一民族の心理的特性は簡単に変化するものではないからである。そして、個別民族の固定的特性によって民族特有の思想、制度、美術などが生まれるという。

> 各国民は孰れも皆その解剖的性格の如く固定せる一種の心的組織を具して、その心的組織よりその国民の感情、思想、制度、信仰及び美術等の胚胎し来るといふ事即ちこれなり。(『民族発展の心理』)

思想、制度、信仰などが国民性を変えるのではなく、国民性の解剖学的な心的組織によって制度と宗教などが決定されるのである。そのため、民族の心的組織は容易に変化するものではないのである。

> 相合して以て一国民の魂を組成する心的及び知的性格は、同国民の過去一切の総合、その先祖の遺伝及びその行動の原動力等を代表するものなり。この性格は同一種族中の個人に存りても甚だ変化し易きが如くなれども、吾人の観察によれば、この種族中に於ける個人の多数は、種の分類を立てしむる解剖的性格の如く固定せる数種の共通的心理性格を必ず具有するものなり。心理的性格も亦解剖的性格の如く、遺伝によりて正規的に且つ恒久的に再生するものとす。(『民族発展の心理』)

民族の個人の一部においては変化が可能のように見えるが、それが民族全体の心理的性格になると、その変化はきわめて遅々として難しく、たとえ一時的に変化があったとしても、その本来の性格は「恒久的に再生」するのである。

ル・ボンは、民族心理におけるこうした固定性を前提にしたうえ、世界の人

種を性格において大きく四つのタイプに分類する。原始時代の人種はフエゴー人、豪州人（原住民）がこれに属し、劣等人種はおもに黒人が、中等人種は中国人、蒙古人、日本人がこれに属し、高等人種は印度人、欧米人がこれに属するとする。そしてこれらの民族においての心理的性格は、それぞれの民族の知識や知能とは関わりがなく、性格的遺伝として固定しているとする。

それでは、民族性を変化させることはまったく不可能であるかといえば、必ずしもそうではない。民族性の変化は教育や制度によって、その内容が遺伝して「多年間同一の方面に蓄積せしめたる時」に可能である。しかし、教育や制度による民族性の変化は、民族性の「主性」を変化させるものではない。知識や制度による変化はあくまでも一時的なもので、民族性の「根本的性格」を変化させるまでには至らない。民族性の「根本的性格」は、その民族の根源的な「核」のようなもので、教育や制度による遺伝的な蓄積によって遅々として変化しているに過ぎない。しかしながら、このような「根本的主体」の変化は大変時間がかかるが、一旦これに変化が起こってしまえば、民族性は一気に変わってしまう。つまり、一つの変化がその民族の「民族魂」を変えることができれば、民族性は一気に変わって後戻りしないというのである。

李光洙は、このようなル・ボンの民族心理学を思想軸にして、朝鮮民族の改造論を唱えることになる。李光洙がル・ボンの説を根拠にしたのは、ル・ボンの説が当時の民族心理を代表する学説だったからであろう。とくに日本ではル・ボンの民族心理学が版を重ねており、やや後のことになるが、植民地行政官である東郷実『植民地政策と民族心理』(岩波書店、1925年）においても、ル・ボンの学説が植民地政策論の拠り所になっている。

李光洙は、1922年４月、『開闢』誌上に「民族改造論」という論文を発表している。論のなかで、李光洙は今日の朝鮮人にとって最大の急務は「朝鮮民族の改造」で、その「改造」は更新、改革、革命などより一層「根本的」な命題であるとする。もしも現時点において民族性の改造が行われなければ朝鮮民族はただ滅亡していくばかりである。もちろん、従来にも民族改造運動はあったが、それはことごとく失敗した。失敗した大きな理由は、従来の運動が民族改造においての道徳的な側面、精神的な側面を重要視しなかったからである。民族改造はひたすら道徳的な改造に頼らなければならない。李光洙はこのように民族改造の必要性を展開していくが、こうした発想はすでにル・ボンの学説に大きく影響されたものである。

ル・ボンは、民族性の改造は非常に難しく、制度や政策あるいは革命によっ

てもその「根本的主性」は変わることがないとしている。革命のような重大な社会の変動においても国民性の変動はほとんど伴わないとし、その例としてフランス革命によってもフランス人の性格はなに一つ変わることがなかったとする。遺伝の蓄積による民族性の主性が変わらない限り、変化はあくまでも一時的なもので、すぐに本来の「根本的性格」に戻ってしまうからである。李光洙が社会改革や革命思想に組みしなかったのは、それらの条件が国民性の変化とは無関係であるというル・ボンの学説に依拠していたからである。民族性の主性の変化なしには、民族改造が不可能で、そうなると、道徳、精神的な改造の道しかなくなる。つまり、民族性の核である「民族魂」の改造以外には民族改造の方法はなく、また従来の改造運動はこの点を軽視したため、失敗したということである。

しかし、ここで問題になるのは、改造が本当に可能であるかということである。ル・ボンによれば、民族性の「根本的性格」は教育や制度、革命によっても変わることがない。「附属的性格」は教育、制度などによって変化が可能であるが、「根本的性格」は永久に繰り返されるものである。となれば、朝鮮民族の改造はどうなるのか、李光洙は朝鮮民族の道徳的な堕落を繰り返して強調しており、もしもその悪徳が朝鮮民族性の「根本的性格」であるならば、民族改造は永久に困難であるか、または可能であるとしても膨大な時間を要求するものとなる。ここで李光洙が主張したのは、朝鮮民族は現在こそ道徳的に堕落しているが、ル・ボンがいうような、「根本的性格」においては堕落した民族ではないとことであった。朝鮮民族は元来美徳の持ち主であったが、これが長年の歴史的境遇によって、ル・ボンのいう「附属的性格」に変質があって、現在のような国民性の悪徳が形成されたのである。したがって、朝鮮民族の改造は、民族性の「根本的性格」の改造ではなく、歴史的に重ねられてきた「附属的性格」の改造であって、それは十分に可能である。儒教と李朝の悪政によって汚された民族性の「根本的性格」を取り戻せばよいのである。それはいわば、民族性の創造ではなく、民族性の「中興」と呼べるようなものである。

李光洙は、朝鮮民族の「根本的性格」が悪徳ではないことを、古代史から実例を挙げて説明する。その結果、古代の朝鮮人は「寛大」「博愛」「礼儀」「廉潔」「自尊」などの性質があり、同時に「自主」「独立」「快活」な性格の持ち主であるとする。そのため、改造の対象になるのは「朝鮮民族の根本的性格ではなく、ル・ボン博士のいう付属的性格である」と主張する。したがって、民族改造にかかる時間においても、遺伝的な蓄積を要求する「根本的性格」の変化のよう

に、膨大な時間を要求するのではなく、割合に短時間で可能であるというのである。そして李光洙は改造すべき朝鮮民族の欠陥を次のような箇条書きで列挙する。

(1) 嘘をつかないこと。
(2) 空想と空論を廃し、正しいと思い、義務と思われることを実行すること。
(3) 表裏不同と反覆がなく、義理と信義を守ること。
(4) 姑息、逡巡等の怯懦を捨て、正しいこと、決心したことに向かって万難を越えて突き進むこと。
(5) 個人より団体を、私より公を優先し、社会に対する奉仕を生命とすること。
(6) 普通の常識を持ち、一つ以上の専門学術と技芸を必ず習得し、一つ以上の職業を持つこと。
(7) 勤倹貯蓄を尊び、生活の経済的な独立を計ること。
(8) 家庭、衣食、道路等の清潔など、衛生の法則に合致する生活をし、一定の運動によって健康な体格の所有者になること。(「民族改造論」)

他にも李光洙は、朝鮮民族の「信用のなさ」、「虚偽」と「詐術」の性格、「虚張声勢」などの欠点を取り上げ、それらを改造していかなければならないとする。そして具体的な改造の方法として「改造同盟」の組織を力説する。すでに改造された少数の個人によって「改造同盟」を結成し、それを漸次拡大して民族全体の改造に導いていくという論理である。これらの過程で朝鮮民族はその「劣悪」な性質を改造していくことができるというのである。その実践のために李光洙自身が組織したのが「修養同友会」である。李光洙は、ル・ボンの学説を基盤にして民族改造の理論的体系を試みたといえる。そしてこれが李光洙思想の根幹を成しているといえる。

4．夏目漱石の場合

夏目漱石は、明治36年4月から帝国大学英文学科の講師になり、のちの『文学論』に纏められる講義を行っている。帰国後間もなくである。そして『文学論』(1907年) には次のような個所がある。

> Gustave Le Bonの*The Psychology of Socialism*は通俗にして学説の深奥なるものなしと雖ども集合せる人心の活動状態を知るに便宜あるを以て通読するを可とす。(以下、漱石の引用は岩波文庫版)

漱石がル・ボンの『社会主義の心理学』の英訳について論評した部分である。内容に対する漱石の辛辣な評価とは裏腹に、漱石自身がそれを通読し、また通読を学生に勧めている。また先行論によれば（藤尾健剛「ル・ボン『社会主義の心理学』の波紋」『漱石の近代日本』勉誠出版、2011年)、漱石はル・ボン『社会主義の心理学』の英訳本*The Psychology of Socialism*に多くの書き込みを残していた（『文学論』を書くためのノートには『社会主義の心理学』への言及が五ケ所あるとする)。「深奥なるものなしと雖も」、漱石自身はル・ボンの学説に相当敏感に反応していたといえる。『社会主義の心理学』はいまだ日本語訳がなく、論者もまだ通読していないが、ル・ボンの一大ベストセラーになった代表作『民族発展の心理』『群衆心理』の延長線にある著作であると思われる。『社会主義の心理学』と漱石の関連については、藤井健剛氏によって丁寧に試みられており、詳細はそれに譲るが、氏の論は漱石が具体的に言及した『社会主義の心理学』という著作に影響関係を限定している向きがある。しかし、氏も一部で考察を試みているが、ル・ボンの代表作である『民族発展の心理』や『群集心理』が漱石思想全体に及ぼした影響は幅広くみられるのではないか、と論者は推測する。

例えば、『文学論』の難解さを象徴する冒頭の次のような有名な文章はそのよい例になるかもしれない。

> 凡そ文学的内容の形式は（F＋f）なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに付随する情緒を意味す。されば上述の公式は印象または観念の二方面即ち認識的要素(F)と情緒的要素(f)との結合を示したるものといひ得べし。吾人が日常経験する印象及び観念はこれを代別して三種となすべし。

漱石『文学論』の難解さを示す材料としてよく引用されるこの部分は、さらにFとfの組み合わせとして三つの構成要素を示し、いきなり、「以上三種のうち、文学的内容たり得べき」は、「即ち（F＋f）の形式を具ふるものとす」と結論づける。漱石の文学論の基調をなすこの概念をめぐっては、さまざまな解釈の試みがあるが、その意味する内容は未だ定かではない。そのもっとも一般的な解釈と思われる岩波文庫版の注釈には次のようにある。

> この記号を漱石がどこから得たかは不明だが、すぐ次の記述と合わせる

と、FはFocus（焦点）、fはfeeling（情緒）の頭文字と考えられる。FはまたFact（事実）を意味して用いられることもある。要するに漱石は、文学的な内容は認識の焦点をなす印象や観念（文学の材料となる事実）だけでなく、それに付着する情緒をも総合したものだ、ということである。そしてこのFとf、およびその両者の関係をさまざまに考察することが『文学論』の主要なテーマである。

漱石の文学論の難解さは、文学の解釈に当時の社会学や心理学の概念が多く応用されていることにある。それは『文学論』序において漱石自身が述べてもいる。漱石は「不幸にして余の文学論は十年計画にて企てられたる大事業の上、重に心理学社会学の方面より根本的に文学の活動力を論ずるが主意なれば、学生諸君に向て講ずべきほど体を具せず」と述べている。

この漱石の感想を素直に受け止めれば、漱石の『文学論』は文学論というより、社会心理学（総じて社会心理学のこと）の言説を文学に当てはめて論じた性質が強いと言えるだろう。ロンドン滞在時に漱石は文学研究よりも社会心理学により傾倒していた。帰国後まもなく任された英文学講義に、漱石はロンドンで傾倒し、思索を巡らし、また個人的な自我の問題として取り掛かっていたと思われる社会心理学の理論体系を、自己の文学論につけ刃的に応用した可能性は十分にある。「心理学や社会学の助けを借りて」「文学の本質そのものの議論」を行ったというより、心理学や社会学理論を基本構造とし、それを文学の分析に応用したように論者には思える。イギリス帰国後間もない漱石は、ロンドン滞在時に傾倒していた心理学や社会学の理論で文学論を構築し、社会科学的な分析方法を文学論に応用したため、文学論はいっそう難解になったと思われる。『文学論』は後半に進むにしたがって、文学作品の引用が次第に増え、作品に関する紹介が増し、また出版時には本人による大幅な加筆が行われるが、それにはこうした経緯が関係しているのかもしれない。そしてこれらの過程は、イギリス留学の漱石がいかに社会学や心理学に強くとらわれていたかを証明するものでもある。つまり、『文学論』は基本的には心理学、社会学の大きな構造の上に存在するといえる。

先述したように、『文学論』では文学的内容をFとfとに分けて説明し、その融合体であるF＋fを文学と結論付ける。そしてFとfの具体的な性質を文学的内容から紹介し、最終章では「集合的F」について論じ、さらに文学的材料である「集合的F」が社会状況と時間の推移によって変化する様態を明らかにしている。

そして「集合意識」を「模擬的意識」「能才的意識」「天才的意識」と分類し、説明している。とりわけ漱石は「模倣」(あるいは「模擬」)について多くを述べており、また「「伝染」も「模倣」の一種」(前掲の藤尾論)と認めていたという。「模倣」「伝染」(あるいは感染、以下同じ)などは、ル・ボン『群衆心理』を代表するキーワードでもある。

ここで『文学論』の冒頭で取り上げたFとfのことについて考えてみよう。漱石はそれらをF(認識的要素もしくは文学的素材)とf(情緒的要素もしくは解釈)に分けているが、それはル・ボンの『民族発展の心理』での分類によくあてはまる。つまり「根本的性格(根本的主性)」と「附属的性格」という分類とパラレルになっているのである。固定して変化を伴わないものが「根本的性格」=Fで、「附属的性質」=fは時代によってさまざまに変化するものである。ル・ボンによれば、民族は「根本的性格」と「附属的性格」によって構成されている。「附属的性格」が時代ごとに変化し、「根本的性格」は容易に変化するものではない。遺伝的な変質をもたらすような大きな動因により初めて「根本的性格」に変化が起こり得るが、それはきわめて稀である。それを漱石の『文学論』に当てはめると、「集合的F」における「天才的意識」の場合に該当するであろう。しかし、それは漱石自身が指摘したように、またル・ボンが言うように、めったに起こるようなものではない。日々において頻繁に起こるのは、「模倣的意識」である。「模倣」は「伝染」と相通じる。民族性(あるいは群衆)においては「模倣」と「伝染」が日々に起こるが、それによっても「集合的F」の本体(あるいは天才的性質)に変化は生じない。また漱石のいう「能才的意識」とは努力によるものであろう。つまり、李光洙でいうと民族の「啓蒙」「教育」「革命」等々の人為による努力で生み出されたものを指すであろう。もちろん「能才的意識」によっても民族の「根本的性格」は変化しない。こうした発想は魯迅の発想や作品(「狂人日記」)とも緊密に関係している。さらに民族性における「根本的性格」の「遺伝」、大衆や群衆における「模倣」「伝染」は「阿Q正伝」でも強く見ることができる。漱石と魯迅はほぼ同様の認識を持っていたともいえる。それは李光洙にも同様に見られるが、それらはいずれもル・ボンの民族心理学に由来するものと思われる。

このように、漱石の『文学論』には同時代の社会心理学・民族心理学におけるル・ボンの影響が強く見られるが、漱石の手沢本を調査した藤尾健剛は、「タルドとル・ボンの著書のうち、唯一目を通した」のが、ル・ボン『社会主義の心理学』と断定している。しかし論者は、漱石はル・ボンの『民族発展の心理』

『群集心理』を熟知し、むしろこれらの著作の影響が非常に強かったと思っている。世界的に注目を受け、日本でも早い段階から紹介されたル・ボン『民族発展の心理』『群衆心理』を漱石が熟知していなかったことはありえない。漱石の留学と自我への苦悩、自己本位の世界観、西洋への異様な冷徹な視線は、西洋の新しい社会科学としてもてはやされた『民族発展の心理』『群衆心理』の思想との対決から生まれたようにも解釈できる。漱石文学と文明批評の隅々にそうしたところが表出されている。ル・ボンのいう人種による民族心理の階級区別と「根本的性格」を是認することで、ある種の開き直った自己本位の強い自己肯定が生み出されていくのである。それはしばしば引用される『文学論』の「序」の中でも強く現れている。

> 倫敦に住み暮らした二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繋げるは余の当時の状態なりといふ事を断言して憚からず。

英国人の中に孤立した自己存在の確認は、自己存在の民族的階級、つまり「根本的主性」によって当初から決定づけられたという社会心理学が影響したのではなかろうか。それは単に日本人（あるいは東洋人）への偏見や蔑視や差別という表層的な問題ではなく、科学的に証明された心理学上の定説として漱石に差し迫っていたことが推測されるのである。そこに自己による選択の余地などはない。つまり、のちの「自己本位」とは主体的な選択の結果ではなく、科学的な心理学上の結果として受け入れざるを得ないものだったのではなかろうか。以下に続く『文学論』「序」からはそうした漱石の心理的な機微が感じられる。

> 帰朝後の三年半もまた不愉快の三年半なり。されども余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光栄と権利を有する余は、五千万人分中に生息し、少なくとも五千万分の一の光栄と権利を支持せんと欲す。この光栄と権利を一五千万分の一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、もしくは余が本国を去るの挙に出づる能はず、むしろ力の継く限り、これを五千万分の一に回復せん事を努むべし。これ余が微小なる意志にあらず。余の意志以上の意志なり。余の意志以上の意志は、余の意思を以て如何ともする能はざるなり。

短い文章の中で「五千万」(台湾を除く当時の日本人口か) という言葉が同語反復的に4度にわたって繰り返され、それへの帰属が自己意志によるものではなく、自己意志を超えるところから由来するという認識である。つまり、民族性や民族心理の遺伝の問題が想定されるのである。ル・ボンのいう「根本的性格」の中に個人が収斂され、回帰され、そこから逸脱できないという前提が想定されるのである。「遺伝」による民族性の固着の問題は漱石の「趣味の遺伝」(1906年) の中でも確認することができるかもしれない。

「趣味の遺伝」では個人の純粋な感情である恋愛感情が、祖先からの隔世遺伝のような形で説明されている。旅順で戦死した川上浩一と小野田の妹の恋愛感情が両家の祖先の恋愛感情の遺伝として結論付けられている。ル・ボンによれば、民族は各個人がこうした遺伝的なものを「暗示」により継承して群集をなし、群集は「模倣」と「伝染」によって民族性を形成し、継承していくことになる。「根本的性格」は一時消えたように見えても必ず再現されるという。漱石が「趣味の遺伝」で述べる「矢張り父母未生以前に受けた記憶と感情が、長い時間を隔てて脳中に再現する」とは、個人・群集・民族性の形成過程の一側面を見事に指摘した感がある。ちなみに「父母未生以前」という言葉は、「吾輩は猫である」「門」「行人」にも見られる漱石が好む禅の言葉であるが、それを漱石は「遺伝」として解釈しているのである。ル・ボン『民族発展の心理』の冒頭には次のような指摘がある。

> 一国民の文明は僅少なる根本的思想に基因するものにして、その国の制度、文学及び美術は皆この思想より胚胎し来るものなり。この思想やその成立甚だ遅々たれども、その消滅に帰するも亦甚だ遅々たり。具眼の士は疾より之を明白なる思想と看破すれども、愚衆は依然これを以て議論すべかざるの真理と看做すが故に、相変らず国民大多数の与衆中にその業を継続しつつあるものなり。一の新思想を鼓吹することも難事に属すれども、一の思想を破壊することも容易なる業にあらず。人類は何れの時代に於ても死せる思想と死せる神とに愛着して、痼疾又奈何ともすべからず。

つまり、ル・ボンによると「趣味」というのも民族性の遺伝の要素になるのである。ル・ボンは『群集心理』の冒頭でも「一民族中の各個人が遺伝的に継承する共通の特徴は、全部相集まりて民族の真精神を形成す」と指摘し、遺伝・

群集・民族の固定性を見出している。個人の遺伝（「暗示」）と群集の遺伝（「模倣」「伝染」）は、その総体としての民族性の遺伝要素を構成する。また民族性によって群衆と個人の遺伝が反覆的に作り出される。

漱石の社会心理学的な見解と主張は、「現代日本の開化」（1911年）にも色濃く見られている。日本近代の矛盾を「外発的」である開化と「内発的」である思想土台の中で説明し、神経衰弱にならざるを得ない近代日本の現状を説明している。つまり、日本民族のもつ「根本的性格」（内発的）とは遊離されたまま、西洋近代という「附属的性格」（外発的）の進化によって両者の溝と間隙は大きくなる。その狭間にある近代日本の矛盾と神経衰弱の病巣を切り開いてみせている。漱石は「現代日本の開化」の最後に、「ただ出来るだけ神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くが好かろうというような体裁の好いことを言うより外に仕方がない」と濁しているが、それには「根本的性格」の変化は膨大な時間を要する極めて難しい作業で、いわば、まあほどほどに、というような悲観的な意味が込められているのかもしれない。西洋と日本、自己と他者を厳格に分離する思想は漱石の「私の個人主義」（1914年）「模倣と独立」（1913年）などにも繰り返され、いわゆる「自己本位」を形成していくことになるが、「自己本位」こそ個人・群集・民族においての「根本的性格」あるいは「根本的性格」に当たるのかも知れない。それらの思想は『それから』（1909年）の代助の思想、『三四郎』（1908年）の広田先生の考えにも拡散し、漱石文学の核心をなしていく。

もう一つ指摘しておきたいことは、ル・ボンが社会心理学的な基点として盛んに「衰退」と「滅亡」を語っていることである。『民族発展の心理』では、民族は最終的な利己主義や性格の堕落、道徳の頽廃、または社会主義の発達により当初の「根本的性格」が劣化し、解体され、ついに衰滅していくとする。全体が悲観的な論調である。その悲観主義の一段は『三四郎』の一場面を彷彿させる。日露戦勝気分に浸っている日本国民に対する広田先生の次の言葉はあまりにも有名である。

> 三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢うとは思いも寄らなかった。どうも日本人じゃないような気がする。
> 「しかしこれからは日本も段々発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、
> 「滅びるね」といった。

戦勝気分に浸り、利己主義と道徳の堕落に陥っている群衆の姿に、民族の滅亡を断言する広田先生は、ル・ボンが民族衰滅の要因として取り上げた要素と重なるところを近代日本に見出したのかもしれない。

5．魯迅の場合

論者の簡単な調査によると、ル・ボンの著書が中国語に翻訳されたものには、次のようなものがある。

黎朋著・呉旭初、杜師業訳『群衆心理』(商務印書館、上海市、1920年)

原著：La psychologie des foules

頼朋著・張文表訳『民族進化的心理定律』(上海文芸出版社、1935年)

原著：Lois psychologiques de l'évolution des peuples

上記の二冊は日本での翻訳より多少遅れているが、あるいはそれ以前の翻訳が存在している可能性もある。また二冊の翻訳と大日本文明協会の『民族心理及群衆心理』との関連性、さらに『民族発展の心理』の翻訳が日本では姉妹書になっている『群衆心理』よりかなり遅れている理由などは定かでない。おそらくそれ以前に翻訳された可能性も高い。しかし、少なくとも1920年代に、すでに述べたように李光洙がル・ボンを翻訳紹介した1922年４月、「民族改造論」を掲載した1922年５月よりやや早い段階で『群衆心理』が翻訳されたことになる。ル・ボンの受容が中国と朝鮮においてほぼ同時期といってもよいのかもしれない。それがまた魯迅の場合になると、日本語訳で読んだ可能性が高く、中国語訳のもつ意義はさほどないかもしれない。

ここでこれから考察することになる「狂人日記」「阿Q正伝」が発表されるのはそれぞれ1918年と1921年ということである。すでに述べた李光洙がル・ボンの影響と思われる一連の創作を開始したのは、「子女中心論」(1918年)「新生活論」(1918年)「少年に」(1921年) に続き、1922年にル・ボンを翻訳し、「民族改造論」を発表する。魯迅の代表作「狂人日記」「阿Q正伝」とほぼ時期を同じくしている。

李光洙は「子女中心論」で父系中心の親の世代から子女を開放しなければならないとし、これからの子女を伝統と断絶した「新種族」であると主張している。つまり、李光洙は「子女中心論」で、「私たちは祖先をもたず、父母を持たない。今日今時に、天上から吾が国土に降臨した新種族として名乗らなければならない」とし、父母の伝統（遺伝）と隔絶された新民族の創出を唱えている。

つまり子供＝新種族＝新民族というような図式である。伝統（遺伝）と断絶された世代から民族性の改造を試みているのである。同様の論理は、「新生活者」「少年に」においても繰り返され、新旧朝鮮を明確に分離して伝統との断絶を力説している。いずれもル・ボンの影響が強くみられる論拠である。そしてこれとほぼ同時期に、魯迅は、ル・ボンの影響が強くみられる「狂人日記」と「阿Q正伝」を発表している。また実際に魯迅は同時期にル・ボンを読んでいたのである。

『魯迅全集』（学習研究社、1984年）には、魯迅がル・ボンについて言及したところが3か所見られる。「随感録三十八」（一九一八年十一月）に2か所。「これとあれ」（一九二五年十二月）に1か所である。そして「随感録三十八」には「狂人日記」や「阿Q正伝」の内容と密接な関連が推測される次のような個所が引用されている。

> 混迷した祖先が混迷した子孫をつくる。これはまさしく遺伝の定理である。フランスのG. Le Bon『民族進化の心理』のなかに、この問題に触れてつぎのように言っている（原文は忘れたので、今は大意のみをあげる）。—「我々の一挙一動は、自主的であるようで、実はたいてい死者の牽制を受けている。我々一代の人間と、これまでの数百代にわたる死者たちとをくらべたら、数のうえでとうていかなうわけがない」と。

魯迅はル・ボン『民族発展の心理』の第1編第1節を引用して、堕落し、「進歩せざる民族」が絶滅していく過程を遺伝から説明し、もし中国人が「混迷した心」と「混迷を助成する事物（儒・道二派の文書）」を「薬」に頼ってうまく取り除いていけば、その「病毒」を「いくらかうすめることができ」、ル・ボンのいう「絶滅」から免れることが可能であると推定する。「これとあれ」においても、「死者の力は生者よりも大きい」というル・ボンの指摘を引用しながら、伝統と断絶する新しい民族性の創造に期待を込めている。魯迅が本文で引用したル・ボンの『民族進化の心理』とは、おそらく大日本文明協会編の日本語版『民族発展の心理』のように思われ、またル・ボンの受容においては李光洙ときわめて類似し、状況も切迫している。そうした切迫した状況は「狂人日記」や「阿Q正伝」にも確認できるのである。

「狂人日記」は被害妄想狂という知人の日記で構成された短文で、狂人が人間の肉を食う周りの習慣について怯える話である。中国は四千年来絶えず人肉を

口にしてきたとし、その伝統との決別を、子供に託して期待をすることで作品は終わる。

> 人間を食ったことのない子どもは、まだいるかしら？
> せめて子どもを……（岩波文庫版、以下引用は同様）

伝統と断絶された子供に期待を込めるという図式は、李光洙の思想と共通している。民族性の改善の可能性として伝統と隔離された（人肉を食べたことのない）子供に期待が込められている。すでに述べたように、ル・ボンによれば民族性の根本的性格は長年の遺伝によって蓄積されて変化するものではなく、またその下位概念になる群衆は「模倣」「伝染」によって同質化する。さらに個人は「遺伝」と「暗示」によって群衆心理と民族心理を共有化していくのである。「狂人日記」で見られる「食人癖」とは民族性における堆積化した遺伝による負の民族性を指しているのだろう。李光洙の言葉でいうと「民族性の堕落」ということになる。そして魯迅は「狂人日記」の中で「食人」という悪徳が民族の「遺伝」となって四千間以来中国で繰り返されてきたと描写する。

> むかしから絶えず、人間を食ってように覚えているが、あんまりはっきりしない。（中略）
> 四千年来、絶えず人間を食ってきた場所、そこにおれも、なが年暮らしてきたんだということが、きょう、やっとわかった。（中略）
> 四千年の食人の歴史をもつおれ。はじめはわからなかったが、いまわかった。

引用文は、民族性の負の側面（食人）が遺伝として継がれてきたことを指し示す部分といえる。そしてそれが中国人の「根本的性格」となっているという認識である。その「遺伝」の断絶を試みる対象として「暗示」「模倣」「伝染」から断絶された子供に一抹の期待が込められている。同様の発想を李光洙も試みているが、ル・ボンによれば後天的ないかなる働き掛けでも民族性の変化は容易ではないとする。民族は「核」「魂」を揺さぶる大きな要因がない限り、民族性は反復し、膨大な時間をかけて遅々として変化するのみである。

さて、「狂人日記」には当初から食人癖をもっていない人間たちの集団が想定されている。野蛮だった頃は食人癖を持っていたが、途中で考えを変え、人を

食べずに「ひたすらよくなろうと努力」した人間達である。そしてその人たちが「まっとうな人間」として想定され、食人癖の人間たちが「改心」しなければ「まっとうな人間」たちに「ほろぼされてしまう」ことになるとしている。「改心」とは李光洙のいう「民族改造」とほぼ同意の言葉と思われる。漱石でいうと「開化」という西洋主義の方向性になるだろうか。となると、「まっとうな人間」とは、ル・ボンが分類した優等民族（欧米人）のことを指すことになるであろう。あるいはすでに文明開化を成し遂げている民族ということになるかもしれない。

このように、「狂人日記」にはル・ボンの民族心理学の影響と思われるところが多い。李光洙と魯迅の認識が共通しているのもそうした影響の一因なのかもしれない。一方で、民族心理学に加え、『群衆心理』の影響がより強く見られるのが「阿Q正伝」であろう。

「阿Q正伝」の内容は熟知のことと思われ、ここでは省くが、作品には「未荘」と「城内」において様々な噂や評判や伝言などが渦を巻いて周辺に広がり、様々な人間がそれに集団的に影響されていく。大枠としては「革命」をめぐる噂がそうであり、「にせ毛頭」の開化をめぐる騒動がそうであり、細部においては阿Qをめぐる様々な噂が、次々と「未荘」の人間たちに伝播され、「城内」と「未荘」の人間たちはその都度集団的な行動を引き起こすのである。つまり、ル・ボンでいう『群衆心理』においての「伝染」「模倣」である。群衆心理は「模倣」と「感染」によって拡大され、ある種の助長された心理を共有するかたちで集団的行動が惹起されるのである。そしてその「感染」と「模倣」はしばしば「誤謬」によって引き起こされる。ル・ボンは次のようにいう。

> 偖て群衆の観察力如何の問題に立ち帰らんに、吾人は謂はんと欲す、「群衆が集合的になしたる観察は極めて誤謬多く、屢々単に或る一個人が伝染によりて其儕輩に暗示したる所の迷想に過ぎざることあり」と。要するに群衆の証言は之を信ぜざるに如かず。(『群衆心理』)

「阿Q正伝」には「城内」と「未荘」の群衆が次々と観察の誤謬によって事柄が個人から個人へと暗示によって伝染され、群衆は迷走し、滑稽を演出している。作品全体がそのような構造といってよい。それらの箇所は作品全体に偏在しているが、以下に少し例を挙げておく。

たとえば、阿Qが自身の姓が趙であると名乗り、趙旦那からひっぱたかれて

帰ってくると、「この話を聞いた連中」は、「たぶんかれは趙姓ではあるまい」、であっても「口に出すべきでない」と「評し」、「もう誰もかれの氏素性を問題にしなくな」る。つまり、話が伝わり（伝染）、それを皆の「暗示」になり、「模倣」によって群衆全体に感染していくのである。「阿Q正伝」には多くの場面で「伝わった話」「噂」、つまり風聞によって事件が発展していくが、こうした要素は群集心理を構成する典型的な特徴といえよう。それは阿Qが呉媽に恋情を抱いた騒動の後にも起こり、阿Qが城内から戻った時にも同様の事態が反覆される。

> このニュースは、あくる日には未荘全部に伝わった。誰もみな現ナマと新しい袷の阿Qの中興史を知りたがり、そのため酒屋や、茶館や、お寺の軒下やらで、つぎつぎと情報が集められた。その結果、阿Qは新たな尊敬をかちえた。

つまり、「暗示」によって「模倣」と「伝染」が繰り返され、群集心理はいかにも簡単に変わってしまうのである。そうした例は数限りがないが、それが最も劇的に表れたのが「革命」をめぐる混乱ぶりである。城内に革命党が入った噂に、未荘の趙旦那、にせ毛頭、秀才、さらに阿Qや小Dなど、未荘の「有象無象」にこれが「伝染」され、「模倣」され、さらにエスカレートしていくのである。秀才は辮髪を頭の上に巻き上げて同志を集めて静修庵を襲撃し、にせ毛頭は趙白眼などを集めて「革命」について演説を行う。「革命」に強く「伝染」され、みながそれを「模倣」していくのである。

> しかし、未荘にも、改革がなかったわけではない。数日のうちに辮髪を頭の上に巻きあげるものが次第にふえた。さきに述べたように、先頭はむろん秀才先生、次は趙司晨と趙白眼、そのあとが阿Qだ。これが夏なら、辮髪を頭の上に巻きあげたり、たばねたりするのは珍しいことではない。だが今は秋も末だから、この「季節はずれ」風俗は、巻きあげ家にとっては一大英断と言わなくてはならぬし、未荘が改革と無関係とも言えないわけである。

改革、革命が伝染によって未荘に広がっていく様子である。しかし、場内に入った革命党の噂が伝わるやいなや今度はその逆の方向で感染（伝染）が起こ

り、未荘は新たな様子を呈していく。阿Qの処刑をめぐっても一つの方向での暗示がなされ、伝染されていくことになる。ル・ボンのいう「暗示」と「伝染」「模倣」によって一定方向に動く群衆の姿である。ル・ボンは群衆の性質として「流動性」「易変性」「憤激性」「軽信性」「誇張性」「苛虐性」「保守性」などを指摘し、「誘導性」「軽信性」については次のように述べている。

> 吾人は群衆の定義を下すに当りて、彼等の一般的性質の一と見るべきは過度の被誘性を有する事に在りと論じ、且つ多数人の集団に与へたる暗示の如何に伝染し易き者なるかに説き及びしたり。群衆の感情が急速に一定の方向に趨るは、全く此事実に基因するなり。群衆は其最も冷淡に見ゆる時と雖、実は一般に潜匿せる注意力を有するが故に暗示は其効を奏し易し。最初に定めて与へられたる暗示は、伝染によりて直ちに集合せる総員の頭脳の中に刻み込まれ、群衆中の各個人の感情は、須臾の間に同一方向を指して趨るなり。(『群衆心理』)

「暗示」と「伝染」によって急激に一方向に走る群衆の性格は、魯迅の「阿Q正伝」のもっとも特徴的なところといえる。魯迅のル・ボンからの影響が強く感じられるが、しかし魯迅にとって群衆の問題は、たんに未荘という極めて限定された地域の、極めて特殊な阿Q個人の問題ではなかったはずである。未荘と阿Qはそのまま中国で、中国人の民族性の問題に帰結していくのである。個人(阿Q)→集団(未荘)→民族(中国民族性)という図式なのである。題目の「正伝」とはHeredity(遺伝)という訳語でも代わり得る。「序」でくどいほど漫然と述べられる「正伝」「列伝」「自伝」「内伝」「外伝」「別伝」「家伝」「小伝」「大伝」等の概念もHeredity(遺伝)と密接に関わる用語である。もしも魯迅がル・ボンの『群衆心理』を丁寧に読んだとすれば、かならず以下のル・ボンの記述に接したはずである。

> 群衆の特性中には、進化の上より見れば程度の劣等なる者ども(例へば婦女、野蛮人、小児の如き)の中に、必ず発見せらるる諸多の性質(例へば衝動性、憤激性、推理の不能、判断力並に精神の欠如、感情の誇張等の如き)の存在するは注意すべきことなり。(『群衆心理』)

ル・ボンにより提起された集団心理と民族心理は、中国に帰国し、作家とし

て出発する魯迅にとって大きな課題であっただろう。「狂人日記」「阿Q正伝」はそれとの対決、受容の上から生まれたものと思われる。

6．結論

以上、ル・ボンの集団心理や民族心理の受容を李光洙や夏目漱石、魯迅から考察した。李光洙はル・ボンの著作に大きく影響され、翻訳を試み、持論の「民族改造論」を展開する。漱石もル・ボンに接し、読破し、学生に勧めたことが確認できた。またそれが漱石の「自己本位」をはじめ、文明論などに大きく影響したと論者は思っている。一方で、魯迅においてもル・ボンの受容が確認でき、魯迅の思想の重要な軸を形成していることが確認できる。文学作品には「狂人日記」「阿Q正伝」にその影響が強く表れている。つまり、東アジアを代表する三人の文学者はいずれもル・ボンを大いに受容したというのが論者の見解で、結論になる。

しかし、受容には大きな相違もある。それはそれぞれの三人が置かれた状況と関連している。漱石はすでに帝国となった日本の知識人として、ル・ボンの言説からはある程度自由であった。「自己本位」でよいのである。しかし、植民地化され、民族の絶滅を前にした李光洙にとって、ル・ボンの民族心理学は民族生存のための切実な命題であった。それでル・ボンと格闘し、「民族改造論」のなかで生存を模索した。魯迅も基本的には李光洙に近いかもしれない。日本と西洋列強に浸食され、民族の衰退を危惧した魯迅は、李光洙ほどではないにしろ、やはり民族性の問題が差し迫った大きな課題であったと思われる。したがってそれらの問題を思想化し、作品化したと思われる。

[付記]　本稿は、科研費補助金による国際共同研究「現代東アジア文学史の国際共同研究」（代表：東京大学・藤井省三）及び科研費基盤研究C24－26「翻訳の倫理をめぐる総合的研究」（代表：静岡大学・今野喜和人）の研究成果の一部として執筆されたものである。なお、本内容の口頭発表の際（2013年12月22日）には藤井省三氏より魯迅に関する研究助言を頂いた。同僚の戸部健先生にもお世話になった。記してお礼に代える。